

# 求菩提・英彦両山探訪記

佐伯 市野瀬 仁

イト清田先生の日程説明  
が終ると、安堵した感情  
がお互の間に伝わった。

標高 日豊線宇島駅より十七キロ  
七八二メートル  
現在 国玉神社

元 求菩提山護国寺

本山派修験道場

史談会の求菩提・英彦両山の歴史探訪が四月十九日(土)二十日(日)に決行された。天候は「くもり後雨」の予報でがっかりしたが、小雨決行のきまりだから覚悟をきめて参加した。

四月十九日 くもり

参加者二十名、うち女性五名、平均年齢六五才というところ。はっきりした目的を持ち健康に自信のある方々である。貸切バスは佐伯駅前発六時三十分、途中で同行者に乗せながら弥生町で二十名となり、バスは一路求菩提山さしてスピードを上げた。

バスの進行中自己紹介がすむと、求菩提山の明細図とバスの座席図に氏名と住所を書いた用紙・求菩提山と英彦山の鳥瞰図・

広瀬淡窓と中島子玉が詠んだ「彦山」のプリント等が廻ってきた。羽柴弘・清田義雄両先生の労によるものである。ほどよい頃高木会長の挨拶があり、続いて、今回のガ

位置 福岡県豊前市大字求菩提

ご好意による甘夏柑が廻ってきた頃は、喉も乾いて身にしみておいしくいただいた。いつの間にか、宇佐を過ぎ、豊前市で左折、田圃の広がり狭くなった頃、山麓に見る農家の家並がことの外美しい。緑濃き山野を縫って走る車窓からの風景はどうしてこんなにまで清澄にうつり感動をもつて眺められるのであるうか。農村育ちの自分がいつの間にか街の人になってしまったのだろうか疑った。日本画家東山魁夷の『日本の美を求めて』の中に、「私は人間的な感動が基底に無くて、風景を美しいと見ることは在り得ないと信じている。風景は、いわば人間の心の祈りである。…風景は心の鏡である」と。

ここから歩けば右手の道を辿るが、バスは左へと中腹の資料館の下まで上って行く。今回、求菩提山の案内をしていたたく重松敏美氏は豊前市大字下河内の人。年令六〇才ぐらい。東京多摩美大を終えて後、福岡教育大学美術科を卒業された異色の人。清田先生の福岡教大中の教え子。卒業して故郷の中学校教師をしながら、子供達と求菩提を探索して以来、三十有余年、この山の全貌をほぼ明らかにした方である。

バスは新しい登山道の中腹まで上る。バスから下車するとそのまま、全員登り始めた。先頭にたつ重松氏は、この石段はすべて土や草におおわれたものをはぎ取って、陽のめを見たものですという。山に住む者にとって水は砂漠のオアシスに等しい。切り立った岩面があらわに露出し、流れるともなくしたたる水面に薄暗く樹々の影を投じている。かなり深く、かなり広い。修験者の

求菩提山

および国定公園「はて国地」付設図



みそぎ場の靈氣が辺り一面に漂う。勾配のある道に広い敷石が続く。山伏の一念を思う。右手には茅ぶきの岩屋坊一軒が悄然と立ちすくみ往時を思わせてくれる。

登山口より三キロメートルの地点約八合目に山伏の葬儀をとり行なったという安浄寺跡がある。多くの亡者達をすくい給うた

三十三観音が淋しく立っている。かなりのスペースもあるし、時刻もよいので、ここで中食をとることにした。重松氏は煙と炎高山と天界、経筒埋蔵の位置と方位との関連を憑かれたような、別世界に住んでいるような面持で神秘的な話をつづけていく。

伽藍のあった中宮は五〇〇の山伏が籠った護国寺跡で、多宝塔や講堂の跡がみられる。中宮から上宮へ登る石段は「鬼のあぶみ」といって、鬼が一夜の中に夜明を待たず八百五十段をつくり上げたという急な石段である。修験者達はこの石段を読経しながら上り下りしたという。

行者窟がある。天井も両側も巨石で組まれて、奥に仏像が安置されている。山伏は窟から窟を廻り修行をした。求菩提には大小合わせて約百窟あって、窟にも陰窟と陽窟があるという。

「願かけ地蔵」が石段の登り口にあった。真新しい赤いエプロンと白頭巾に黄色の花が供えてある。深山に咲く人と仏の語らいは誰が見ても可愛いくて清い。ひとりでの合掌する。

ついに、頂上のお社にたどりついた。そ

こには巨石が累々と所せましと横たわっている。古木は大蛇の如くからまりつき、異様な風景である。これは、火山噴火の溶岩が二重堆積した結果だといわれている。これより下山する。登る時も下る時も、女性の方はよく草花に足を止めて、一行に遅れるのも気にするようすもない。女は男と違うものだなあと単純素朴な思いをする。

やがて、求菩提五窟めぐりコースとなり、一つ一つが密教独特の異様な姿である。大日窟にはむかしは洞窟の中に神様・仏様を祀っていた。現在、県の文化財に指定され収蔵庫に保管されている大日如来像はもこの洞窟の中に安置されていたものである。

氷室とはよく考えたものだ。夏氷を食べるため冬の氷や雪を溶けないようにした石組がある。天蓋はよほど工夫したものであろう。登り始めてから四時間はたったであろう。

途中迷子になった染矢勘蔵さんは笑顔で私達を迎えてくれた。一寸したはずみに一行にはぐれて、独りで頂上まで登り、けっこう楽しんだ様子、すでに一時間は待ったという。歴史に詳しい上に、山なれしている方だからみんなあまり心配はしていなかつ

た。先ずはお元気で何よりであった。

バスの停留している所に建っている資料館はチョコレート色の屋根と白壁とが樹に囲まれた近代的建物である。内部に陳列された品々は、仏像、石造品、面、法器具、版木、刀剣銃砲、陶器、生活用具、古文書等の量と質の深さは、この山で生活した行者の凝結した物だけに人々の心を打つ。中には国宝の銅板経もある。重松先生から珍しい説明を聞いた一行は、四時間の山中で度胆を抜かれ、今またこの展示物に脱帽したのである。三十有余年、この山を自分の庭の如く、ある時は疑いを持ち、ある時は期待を持ち喜び、失望して登ったり降りたりして、一石一木を見のがすことなく生命がけでいどみ宝を発掘した品々なのである。私達が今歩いてきたコースはほんの一部というのだから、私は家に帰って重松先生が昭和四四年に出版された大著『豊州求菩提山修験文化攷』を手にして内容・外觀共に重量感のある書物に驚き入ったのである。これならばこそ、福岡県は勿論、国の文化庁を動かして、立派な資料館が建設されたのである。

恩師清田先生は謙虚に、そして誇らしげに、「今日のような案内はどなたが来てでもできませんよ。教え子は師を乗り越えてこそ意味がある」と真に迫った語調を残し、重松先生にお礼をいって別れを告げた。

時計は四時三十分を過ぎていた。お互は予想もなかった充実感にひたり深い思いを胸にあたためながら、英彦山さして走るバスに身をまかせた。時刻がさがるので近道をたずねたがバスは行くおそらく一生この道とは縁があるまいと思うような幽邃溪谷の山道をひた走りに走って、英彦山登山口に着いたのは午後六時三十分頃であった。

宿舎に着く前に、国宝「銅の大鳥居」を見学した。どっしりとした風格ゆたかな青銅製の大鳥居。寛永一四年（一六三七）、佐賀藩主鍋島勝茂公の寄進になるもので高さ七メートル。柱の周囲三メートル余。霊元法皇の筆になる「英彦山」の勅額がかけられてある。同行の何人かは柱にさわって確かめていた。

今日は雨一つ降らず黄金の日であった。添田町国民宿舎「ひこさん」の夕食に

でた鯉のあらい、鯉コク、彦山豆腐、ぜんまい煮こみ、コンニャクの山菜料理の味は忘れられないくらいおいしかった。食後、全員一室に集まっていた。中野幡能編の『英彦山と九州の修験道』の中から抜萃したものと、年表を作った冊子を配布し、明日のための説明を私にさせていただいた。

#### 四月二十日

早朝の風は小雨をふくみ、もの凄い強風であった。この分では英彦山登りは断念する外はあるまいと意見の一致をみた。代りに何処を見学しようか。中津市、宇佐神宮、豊前市等という案もだが、大分芸術会館で今日から始まった日展を見て帰ることにきまつた。

風はやんだが雨はひどくなった。

今日のガイドは清田先生が福岡教育大学で教えた学校教師太田夫妻であった。バスは宿舎から神社下バス停にとまった。一步一步登って行く。画聖雪舟が三年間この山に留まって築いたという庭園も雨のためひとときわ風情がある。

訝して山ほととぎす ほしいまま

虚子門下の杉田久女の句碑が目につる。

彦山高き處氤氳を望む

木末の楼台晴れて始めて分る

日暮れて天壇人去り盡くし

香煙散じて作す数峯の雲

(読み下しにした)

広瀬淡窓が「彦山」と題して作詩した句碑が木立の中に屹している。正直なところ、私はこの詩を縁に今回の歴史探訪に参加したようなものであった。うっそうとした杉木立にかこまれたなかに静まる国宝の奉幣殿は間口三二・六メートル、高さ一五・八メートルの壮大な建物で、その昔、細川忠興公の寄進によるもの。朱塗りの柱、桧はだ葺きの大屋根が常緑の杉の緑に映え、深山の雰囲気にとけ込んでいる。境内に樹令八〇〇年の大杉も見られる。

雨の中を頂上めざして登る若人をみるとうらやましい気もしないではなかった。元気のいい同行の婦人の一人が「先生登りたいですねえ」と。これは皆の気持であったが、万一を考えれば仕方がなかった。

名にしおう修験道霊場としてのスケールが大きき、歴史の数々を抱えたその奥深さ

を、降りしきる雨の中で古木の林を仰ぎ見るだけであった。

またの日に訪れてみん彦の山

太田夫妻は毎年のように清田先生宅を訪れるという間柄であるときく。夫妻は近道を誘導するため一時間ばかり車で先導していただいてお別れした。この師にして、この子弟ありの感を深くした。日展の見学を終え佐伯に近づく頃、高木会長、羽柴・清田両先生方の味のあるお話を反題しているうち、無事予定の六時前に佐伯に帰ることができた。

今回の旅はお四国巡りのように聖く、歴史研究グループのように真実を求め、家族閉羹のように楽しいものであった。清田先生からは、出発前も、また、帰ってからもそのない親切なお手紙やプリントをいただき、その上、引き伸した四枚の記念写真を送っていただいた。「旅行は、事前研究と事後の整理を併せて楽しみたい……」のお言葉があった。

旅行を終えて、お茶やお花友達同志のご婦人の方から、こんな話を聞いた。「私の家のにじり口には、みそぎ場の辺からもち

て帰った、やまわさびが白い花を咲かせていますのよ。紫の種が見えます。苔も育っています。ふでりんどう、ぎぼしゆ、すみれも。みんなあの山にあってこそいゝのでしょうがねえ」と。

私達同行の士は旅を終えて、人それぞれに感じ、考え、楽しみ、何かを行じていることだと思っている。

参考資料

秘境求菩提山 福岡県豊前市

観光のしおり // 豊前市

英彦山 // 田川郡添田町

国民宿舎 // 添田町英彦山

ひこさん

(51ページのつづき)

され、先年台風によって倒壊後、復元工事の際、塔下部から感骨器、人骨、経筒などが発掘されているので佐伯氏一族にかかわる供養塔であろうと考えられている。又佐伯氏十代の祖惟治が、千代鶴の病氣平癒祈願のため建立したとも伝承されている。